

【1】 論旨まとめ

行き詰まりつつある現代の資本主義社会の問題点を、「経済学の父」と呼ばれる アダム・スミス（1723 - 1790）を槍玉に挙げ、浮き彫りにしていく。問題の突端にいるのは「経済人」である。そして、「経済人」的な考え方こそが、世界に閉塞感をもたらし、息苦しくさせているのだ、と説いている。

【2】 「経済人」とは何か?

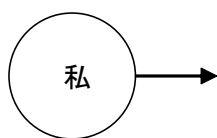
「経済人とは、不合理な旧習から解放された現代の起業家だ。(略)自分自身が王であり皇帝だ。誰も彼を支配できない。(略)経済人は自分で自分の生き方を決めるし、他人の生き方には口を出さない。彼は有能である。なぜなら、人間だからだ。人はすぐれた思考能力を持っていて、そのために世界に君臨できる。彼は自由だ。そしてどんなときも、あらゆる選択肢を一瞬で計算し、最善の選択肢を見つけ出す。まるでチェスの王者のように、無数の可能性のなかから最善の道を選びとるのだ。さらに彼は公平である。なぜなら人をどこから来たかではなく、どこへ行くかで判断するからだ。」(p.39-40)

「合理的で利己的で、環境から切り離された経済人。(略)彼にとって社会は存在しない。あるのは個人の群れだけだ。」(p.41)

【3】 『深い川』から「経済人」を読む

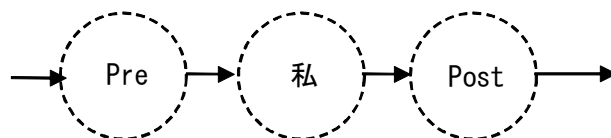
遠藤周作(1923-1996)の『深い川』(小説の舞台は1984年頃)も、経済人的な考え方が支配する世界への、文明批評になっていると読める。[経済人]に、[転生]を対峙させる。

[経済人]



「私」が起点

[転生]



「私」はあくまで結節点。

○ 大津の[転生] (講談社文庫 p.318)

「ほら、玉ねぎは今、あなたの前にいるぼくのなかにも生きているんですから」

○ 沼田は童話で[転生]が失われる世界を描こうとした(講談社文庫 p.247)

死せる者たちの次の世界、^{やつしろかい}八代海。村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村を病気にする。村人たちはその工場を訴えるが、それは病気の原因を作る廃液を流したことだけではなく、祖先や亡くなった両親や親類や兄弟が魚になって生き、やがては彼らもそこに生まれかわる次の世を破壊したためであった。(水俣病・公害)

【4】 縁起的現象としての「私」 中島岳志(1975-)

「仏教における業は前世の報いというふうに誤解されることが多いのですが、そうではなく「縁によって成立している私」という存在に関わる言葉です。(略)ゴータマ・シッダールタは、アトマン、すわなち絶対的な我は存在しないことを説きました。本当の「我」はどこまで追及しても存在しないことが仏教にとっては非常に重要なのです。むしろ、存在するのは縁起的現象としての「私」というものだけであるというのです。」(伊藤亜紗、中島岳志他『「利他」とは何か?』集英社新書 p.99)

自分の個を超えた力に促されて生きていることを、仏教の世界では「業」と考えてきました。業とは、後ろから押す力、何かオートマティックな力です。そして、このような自分の意思とは違う何かが働くという問題を考えないと、利他の革新に迫れないのではないかと私は考えています。(同上 p.102)

【5】 「経済人」の閉塞感を打開する手がかりとして「縁起的現象としての私」を考える。そのときに想起したふたつの文。

○ 阿部謹也 (1935-2006) (『自分のなかに歴史を読む』1988 ちくま文庫)

(略) 私たちが日常生活を送るなかでなにげなくしている行為や行事が、現在だけのものであると必ずしもいいきれないのです。たとえば道で煙草をすおうとしてマッチがないとき、通りすがりの人に「すみませんが火を貸してくださいませんか」といえば、たいてい気軽に貸してくれるでしょうし、マッチで煙草に火をつけてくれたあとで、「ではいつ返してくださいますか」と聞く人はまずいないでしょう。ところが、電話をかけようとして十円玉がないとき、通りすがりの人に借りるとしても、返す約束をしなければ借りられないのです。

ではなぜ火ならよいのでしょうか。いろいろな考え方がありますが、石器時代に人間が火を聖なる共有物とみなしていたことが、私たちの意識の奥深くでいまでも生きていて、火を貸すことは人間としての当然の義務だと考えているのかもしれないのです。

このように考えてみますと、私たちは現在に生きていながら、私たちの振る舞いや使っていることばその他のなかに、数えきれないほどの過去がしのびこんでいることに気付くのです。ことばはいうまでもなく過去から私たちに贈られたものですから、ことば本来の意味を探ってゆくと、遠く古代にまでさかのぼることばはひじょうに多いのに、私たちはそのことに気付かずに使っているのです。

旧暦のお盆のころになると、数百万人にのぼる日本人が故郷へ帰ります。一応墓参りをするためとなっています。墓参りとは死者と会い、死者と交流することでもあります。現在都会で忙しく暮らしている人は、人間は死ねば無にかえてしまうと理屈では考えているかもしれませんが、現実にもそのように考える人でもお盆に里帰りをするとき、死者と出会う機会を自らつくっているのです。

私たちの意識の奥底に過去がしのびこんでいるのです。(後略)(p.52)

○ 宮沢賢治 (1896-1933) 『春と修羅』序詩(1924)

わたくしといふ現象は / 仮定された有機交流電燈の / ひとつの青い照明です / (あらゆる透明な幽霊の複合体) / 風景やみんなといっしょに / せはしくせはしく明滅しながら / いかにもたしかにともりつづける / 因果交流電燈の / ひとつの青い照明です / (ひかりはたもち その電燈は失はれ) (後略)

【6】 課題

歴史が生きている(死んだ歴史ではない)、あるいは、人を生かす歴史をどのように取り戻すことができるのか?

【おまけ】 アダム・スミスの「見えざる手」の意味について。じつはアダム・スミスは「経済人」を称揚したわけではなかった?

島田雅彦(1961-) (別冊NHK 100分de名著『「幸せ」について考えよう』p.60)

アダム・スミスに代表される古典派経済学者は、市場原理に則ってやれ、と言ったわけではありません。富が一箇所に集中して偏在することを避けよ、要するに、金は天下の回りものなのだから、再投資と再分配へどしどし回さなければならないと言ったのです。金が回り回って、経済は動いていく。それをもって「見えざる手」と呼んだのです。だから、市場において自由競争をやっていけばよいという市場原理主義にお墨付きを与える意図など、もともとはない。(略)